

# NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

March 2013 vol.17



島根県芸術文化センター  
SHIMANE ARTS CENTER  
島根県立石見美術館  
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「和歌と美術 歌のたのしみ、絵のよろこび」

なぜ、人麻呂は「おじいさん」なの？

企画展「Kimono Beauty キモノ・ビューティー ―シックでモダンな装いの美 江戸から昭和―」

ビューティー  
キモノ美人に思いをよせて

「平成24年度島根県造形研究大会の受け入れ」報告

益田市立東中学校との授業連携

# 17



《人麿図屏風》 江戸時代 当館蔵

「和歌と美術 歌のたのしみ、絵のよろこび」

2013年4月20日(土)～6月3日(月)

休館日:毎週火曜日(ただし4月30日は開館)

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

- A. 島根県立万葉公園の車どめにほどこされた人麻呂のレリーフ  
 B. 画 伝藤原信実、書 伝後京極良経《佐竹本三十六歌仙絵「柿本人麿」》  
 鎌倉時代 出光美術館蔵 重要文化財(5月6日まで展示)  
 C. 酒井抱一《人丸図》 江戸時代 京都国立博物館蔵

## なぜ、人麻呂は「おじいさん」なの?

当地、石見は、『万葉集』を代表する歌人で「歌の聖」と讃えられる、柿本人麻呂ゆかりの地である。街を歩けば色々な所で看板に描かれた人麻呂や、時には立体的な人麻呂にも遭遇する(図A)。地域の人々には、「直衣姿で烏帽子をかぶったひげの老人=人麻呂」という認識が定着している。

何年前か、当館所蔵の《人麿図屏風》(表紙)の展示中に「人麻呂の絵はどうしておじいさんばかりなの? 若い人麻呂の絵はないの?」と、きかれたことがある。その時は「おじいさんの姿の決まった型があったからです」というような返答をしたと記憶しているが、このたびの企画展に際し、もう少し詳しく、私なりの回答を試みたい。

現存する人麻呂像のうち、古いものとしては鎌倉時代の作品がいくつか知られている(図B)。文献に記された最も古い例は、平安時代の後期、元永元年(1118)に藤原顕季という貴族の館で行われた歌会の記録で、人麻呂を描いた掛軸の前にお供え物をして、集った人々が歌を詠んだことが記されている。歌の神様をお迎えて歌を捧げるという趣向だ。この時の人麻呂像は「烏帽子をかぶり、直衣を着て、左手に紙を持ち、右手に筆を持った六十歳あまりの老人」だったと記されている。この儀式は「人麻呂影供」とよば

れ、こののち広く行われるようになった。また、鎌倉時代の説話集『十訓抄』にも人麻呂像についての話がある。平安時代中期の貴族、藤原兼房が日頃から人麻呂を崇拝し歌の上達を願っていたところ、烏帽子と直衣を着て紙と筆を持った老人の姿で夢に現れた。兼房は目覚めるとすぐその姿を絵に描かせ、毎日拜んでいるうちに歌がうまく詠めるようになったという。こうしたエピソードから、平安時代末から鎌倉時代には「直衣と烏帽子姿の老人」として描かれた人麻呂を「歌の聖」、「歌の神様」として拝む習慣が定着していたと考えられる。江戸時代までの色々な人麻呂像を見ると、筆と紙は省略されることがあり、烏帽子に直衣という装束は稀に中国風の頭巾と衣装に替わることもあるが、白髪で髭のある老人という「型」に変化はない。ちなみに、平安末期に誕生した老人の人麻呂像には、やはり老人として表現される中国の高名な詩人、白楽天のイメージが重ねられたという説がある。若者よりも老人の方が知恵や徳がありそうに見えるし、老人という「型」が重要なのであれば、勝手に若返らせると御利益が減るような気がする。江戸時代には厳粛な神というよりは「みんなが知ってるキャラクター」として描かれた、ちよびり愉快な人麻呂像も現れたが(図C)、ここでも「型」は

踏襲されている。この人麻呂は筆も紙も持っていないので、衣装が違ったり若者の姿だったりすると、誰を描いたのか分からなくなってしまうだろう。こうして人麻呂は、平安時代から江戸時代まで「ゆるりと座っているおじいさん」として描き継がれてきたのである。

ところが近代になると、事情が多少違ってくる。明治になって実証主義的な考え方が浸透すると、神様ではなく、飛鳥時代に実在した歌人として人麻呂を描こうとする画家が現れ、中には若き日の人麻呂を想像して描いた作品も登場した。

ともあれ900年もの間、聖俗あわせてこれほどたくさん描き続けられているキャラクターは、他にはないのではなかろうか。光源氏や在原業平というロングセラー美男子キャラもいるが、彼らに身体的な特徴はないので、物語を示す背景なしに描かれてもハッキリ認識されるほどには「キャラ立ち」していない。人麻呂の経歴や、どこで生まれどこで没したかについては諸説あるが、本展覧会ではそのことはさておき、人麻呂がどう描かれたか、そしてその絵を人々がどう見たかについて知っていただきたいと思う。



図1

図1.《枇杷色縮緬地ヨット風景模様着物》大正時代 個人蔵

図2. 武藤嘉門《ショーウインドウ》(部分) 昭和12年 当館蔵

図3.《紅綸子地松笹扇地紙模様打掛》江戸時代 ポストン美術館蔵  
Photograph © 2013 Museum of Fine Arts, Boston



図2



図3

## ビューティー キモノ美人に思いをはせて

ファッションは時代を映す鏡だといわれる。当館で日頃展示している西洋のファッションは、コルセットの有無やスカート丈の長短など、服の形状に時代ごとの変化が現れており、これを女性の社会的役割や身体観の変化と重ねて説明することが多い。それに比べて日本のきものは江戸時代以降、形にほとんど変化がなく、流行は主に色や柄にあらわれてきた。そのため西洋のファッションほど分かりやすくはないのだが、きもの流行も、もちろん社会情勢に応じて移ろってきた。

身分制度が定められていた江戸時代には、武家、公家、町人という階層によって、きもの素材や柄に違いがあった。展覧会ではコーナーを分けて、それぞれの特徴を紹介する。

近代になると、きもの流行にも西洋の影響があらわれる。明治時代には化学染料の質や技術の向上により、鮮やかな色彩を自由自在にきもの上に展開できるようになった。大正時代には、きもの柄に洋花やヨーロッパの風景といった西洋的なモチーフが登場した(図1)。昭和時代初期になると、1920～30年代に世界的に流行したアールデコのデザインを反映した、幾何学的な造形が現れた。

ところで、きものは人が着用しているかいな

いかで見え方が大きく異なる。美術館で展示する時も、図録に掲載する写真を撮る時も、模様がよく見えるように衣桁に掛けて、平たい形にする。しかし人が着用すると、必ず隠れる部分が出てくる。きものデザインは、もちろん人が着ることを前提に考えられているので、実際に着られたときのことを想像しながら見た方が面白い。また、時代によって裾の処理や帯の結び方などの着付けや、他の装身具との組み合わせ方が少しずつ変わってくる。こうしたことは、きものだけを見ても分からないので、当時の絵画や写真が大事な手がかりとなる。今回の展覧会では、きもの姿の女性を描いた絵画や、その時代の流行を反映した出版物などをあわせて展示する。これらは服飾の資料として貴重なものだが、難しいことを抜きにしても、昔の人々の生活を知るのには面白い。試みに、昭和時代初期の様子をのぞいてみよう。

社会の西洋化が進んだとはいえ、一般女性の服装は洋服ではなく、きものが圧倒的に多かった。しかしこの頃には日本髪より手入れが簡単な洋髪が増え、パーマントをかける女性も現れた。また手袋や洋傘、ハンドバッグといった洋風の小物とのコーディネートが楽しめるようになる(図2)。あるいは帯を胸高にしまって襟を大きく開けるドレス風の着こな

しが若い女性の間で流行するなど、ファッションの和洋折衷が行われた。洋服に衣替えるのではなく、きものに西洋のファッションを取り入れたところに、きものへの根強い支持がうかがえる。ただしこれは女性たちが100パーセント自主的に選んだのではなく、「女はきもの、おしとやかに(洋装なんて生意気だ!)」という保守的な視線や、きものを売るために次々に流行を生み出した呉服業界の戦略もからんでいる。ここで重要な役回りを演じたのが、婦人雑誌というメディア、およびそこで活躍した画家たちなのだが、これについては展覧会図録の中で紹介したので、そちらを読んでいただきたい。

展覧会名「Kimono Beauty」は「きもの美」という意味だが、「きもの美人」とよむこともできる。本展の目玉は、明治時代に海を渡ったポストン美術館のビゲローコレクションから初めて里帰りする11点のきものである。豪華かつ状態のよいものを選びすぎて紹介するのだが、中には婚礼衣装も含まれている(図3)。花嫁はこの美しい打掛に、どんな気持ちで袖をとおしたのだろうか。江戸から昭和までの、きもの美しさをじっくり味わうと同時に、各時代の女性の生活にも、ぜひ思いをはせていただきたい。

(川西由里 当館主任学芸員)



## 益田市立東中学校との授業連携

平成24年10月20日、島根県造形研究大会が当館をメイン会場にして開催された。これは、端的に言えば美術の授業を発表し合う、学校の先生の研修大会。市町村の教育委員会が受け入れ母体となるのだが、平成24年度は益田市が当番となること、指導や授業のあり方を左右する学習指導要領が大きく改訂され、学校の美術教育の中で「鑑賞」が占める割合が大幅に増える時期の開催となるのが平成22年の秋から見えていた。益田市から、大会テーマを「鑑賞」と「美術館との連携」とし、展示室で本物の作品を用いて中学の授業公開を行いたい、と申し入れがあったのはその頃だった。当館としては平成23年度の終わりに「鑑賞」をテーマとした企画展「mite! ね。しまね」(以下、mite! 展)の開催が決まっていたこともあり、できる限り協力する約束をした。

中学の授業発表者となった益田市立東中学校の美術科教諭、和崎正美先生が考える「美術館との連携」は、学芸員も授業者の一人となり授業を組み立てから共に考えることにあった。そのためmite! 展担当ということで大会の受け入れ窓口になった私も、「対話による鑑賞」の方法を取り入れた授業を大会本番まで計6回(3回×2クラス分、事前授業含む)実施した。

「対話による鑑賞」とは、作品に関する情報(作家名や作品名、解説など)を一切持たずに作品をよく見て、見たことを根拠に対話を重ねる鑑賞法である。mite! 展はそれ

を取り入れた展示であった。対話には進行役がいて、授業ではその役を教師が担うが、思い思いに述べられる意見をまとめ、確認し、すべての意見を肯定的に回収し、対話を展開させる。対話の最後は特定の回答を設けず終わる。観察力、推察力、想像力の強化や他者理解の心を養うなどの効果が報告されているが、この方法での授業は、そのときの生徒の発言や、進行役の力量により対話の深まりに差が出るなどの不確定な要素が指摘され、また美術史に基づいた「正しい」作品解釈を提示しないことへの違和感もあってか、否定派もいる。しかし学芸員の実感として、お客さまの発する疑問をもとに対話しながら伝えたことは、比較的記憶してもらえことから、主体的な美術鑑賞を促す仕掛けとして同方法を授業に取り入れることは効果的だと考えている。

最初の授業はmite! 展の中で行った。進行役を和崎先生と私の二人で分担し、クラス全員で一枚の作品を鑑賞した。うまくいったが、新しさがないようにも感じた。大会に向けては、「〈制作〉と〈鑑賞〉の合流」を大きなテーマとした。授業を受ける生徒たちは3年で、3月には中学を卒業する。新たな世界に進む前に、軸となる「私」について考える機会としたい、という和崎先生の思いから、大会では自画像の制作と、その合間に鑑賞を挟む試みを提案発表した。まずは学校で、「私」について考える時間をもち、制作に取りかかる。次に「描きたい内容に応じて描き方は変わることを知る」をねらい

に、ターナーの初期の作品と後期の作品を見比べる鑑賞を美術館で行った。ターナーの初期作品は教会内部を描いた、描写が大変緻密な作品。一方晩年の作品は嵐の山を、大胆な筆遣いで描いた作品。大気のうねりをあらわすもやもやとした色の広がりや重なりが見所だ。2作品を比較鑑賞し、対話の途中で同じ作者の作だと伝えることにより、自ずと一人ができる表現の幅の広さに思いを馳せる時間とできたように思う。「対話による鑑賞」はオープンエンドが基本だが、このように作品選びを工夫する事により、誘導せずとも期待した「ねらい」に生徒たちの関心と思考を向ける事ができると分かった。

このあと更に制作をし、仕上げの前に今度は卒業制作として描かれた藝大生の自画像2作品を比較鑑賞することとし、この時間を大会当日での公開授業とした。一方は正面を見据え、自信にあふれる姿を堂々と描いた自画像、もう一方は上等な洋服に身を包みながら見るものを睨みつけるような視線を投げ掛ける、しかしどこか頼りなげな自画像であった。生徒たちが授業の最後に書いた感想には、表情から人柄を想像するなど、見られたい姿としての「私」を、自らと重ねながら想像したと分かるものが散見された。

展示室での授業実施は調整項目が多く、容易ではない。しかし本物の作品を根拠に語る生徒たちの言葉は豊かであったように思う。今後も連携を続けたい。

(廣田理紗 当館学芸員)



図1



図2

図1. 企画展「mite! ね。しまね」での公開授業の様子。

図2. 企画展「東京藝大美術館所蔵 日本近代美術の名品展」において実施した公開授業(大会当日)の様子。二班に分かれ、作品を鑑賞。後で二班が合流し、鑑賞体験を互いに話し合い、シェアした。